傳文庫 廿一

万亭應賀著

一陽齋豐國畫

菓義

錦重堂

へ13
3836
9

倭文庫拾編

万亭應賀作

嘉永四年
秀ノ孟陬

上

門へ13
號3836
巻9

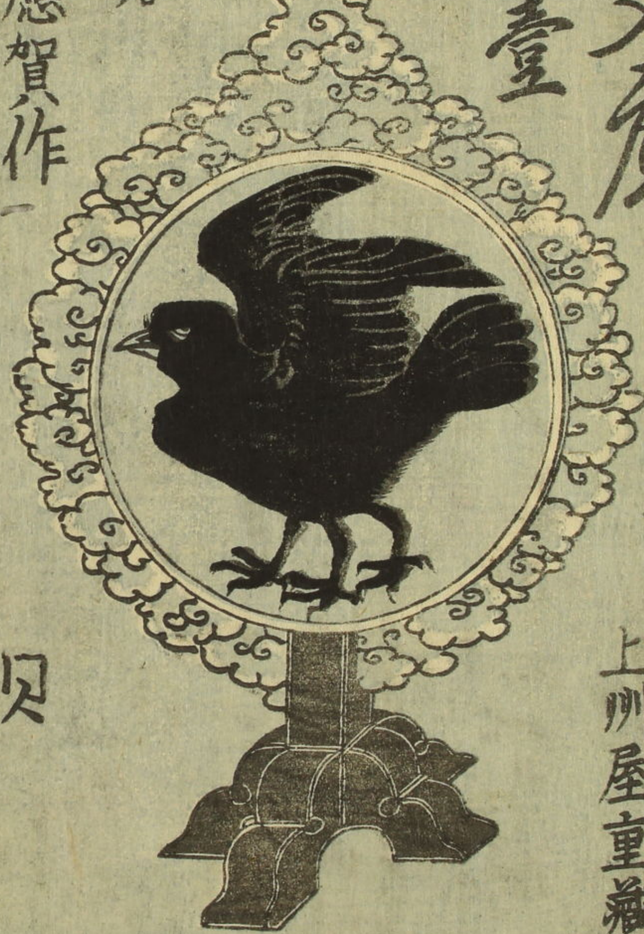
倭文庫 貳拾壹 編

上巻 之壹

辛亥ノ春

万亭應賀作

一陽齋豊國画



貝 國綱画

元大坂町代地用
上州屋重藏板

釋迦八相倭文庫第二拾一編之序

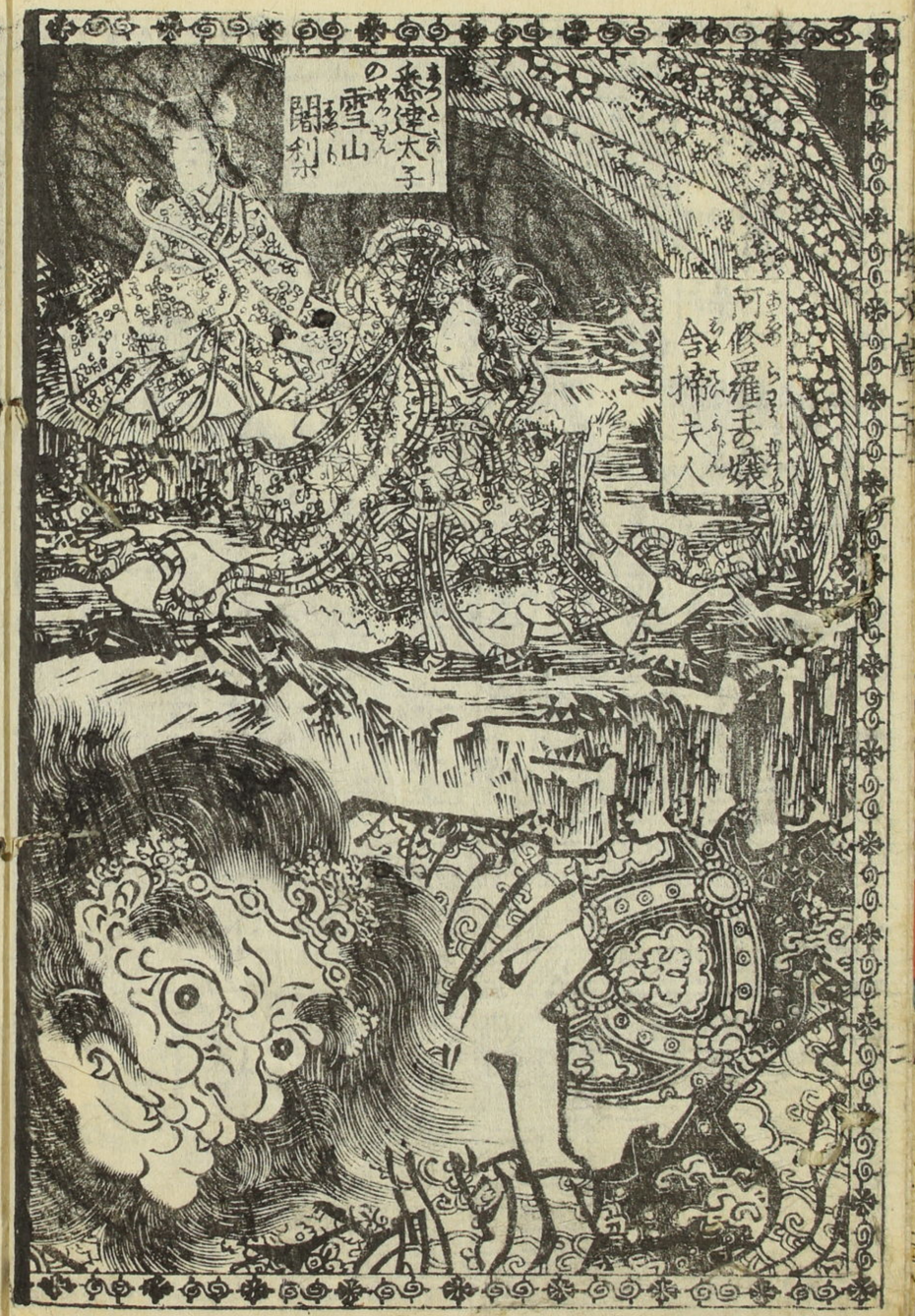
夫極善動天地極悪亦動天地されば功利天の帝釋天兜摩貨多羅河修羅王の女舎脂夫人を奪取依之舎脂の聟羅睺阿修羅大に怒て十六万六千由旬の天身に現ト生涯の恥これに過ぎと四海の大軍をもて喜見城を攻寄る帝釋六陣の隊を立守護させられと終に六陣の軍乱て危けきとき善法堂にて香薫般若の空寂を講讃させしめ天帝に舎脂を連て須弥山の道に金翅鳥の卵ありこれを踏ぶしく走られば之の不殺生の徳にて金翅鳥の助を受一此説を諸経の中より抜出して芥麦の如姫刀称ふものの御側へ出せば花さきて此巻の評判を先希ふ

嘉永四年辛亥
孟陽吉辰發行

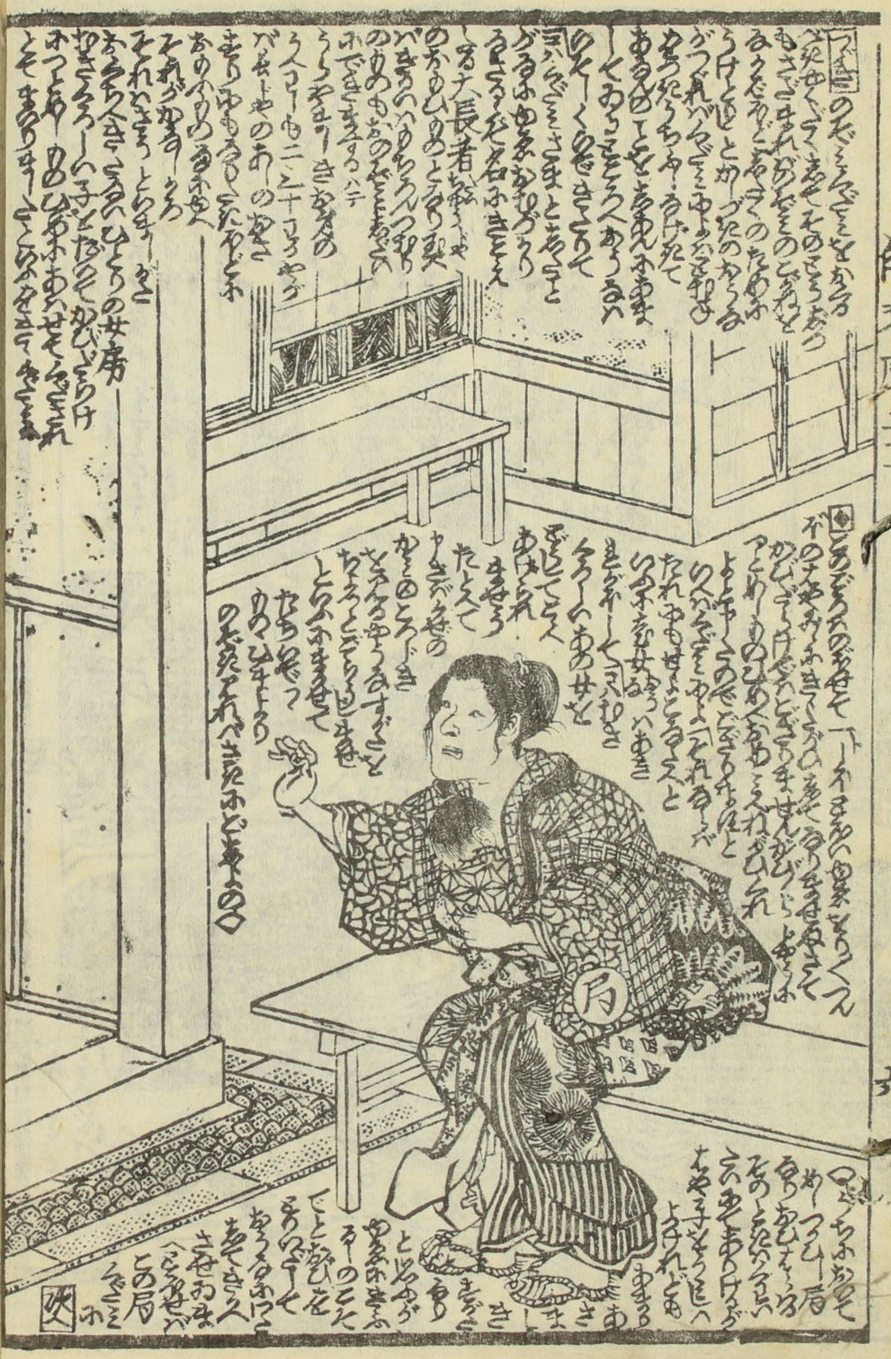
万亭應賀誌

摩耶夫人の産所
浄飯王の御舎弟
白飯王の嫡男
阿難太子
孤杖の娘
瞿陀弥女

摩耶夫人の親族
孤杖の嬢悉達太子の更衣
瞿陀弥女
白飯王の娘阿難の
太子の妻
更方摩耶夫人
浄飯王の御舎弟
甘露飯王の代継
阿難太子


悉達太子の雪山闇利ホ
阿修羅王の嬢舍掃夫人

翅三百万里の金翅鳥
功利天喜見城の帝釋天
舍掃夫人の聲羅睺阿修羅
帝釋天羅睺阿修羅乃軍ヲ追ヒ不殺生の功德ヲよくく金翅鳥ニ助力を請たまふ



奥奉公娘一代成人双六　二編　万亭應賀作　一陽齋豐國画

奥奉公出世双六　万亭應賀作　一陽齋豐國画

武藝立身館双六　万亭應賀作　一陽齋豐國画

日蓮記旭衣　三編　万亭應賀作　一陽齋豐國画

神代藻塩草　二編　万亭應賀作　一陽齋豐國画

重榮御江戸繪圖　奉書四枚半續

應賀作豐國画

一陽齋豐國画

錦重堂梓

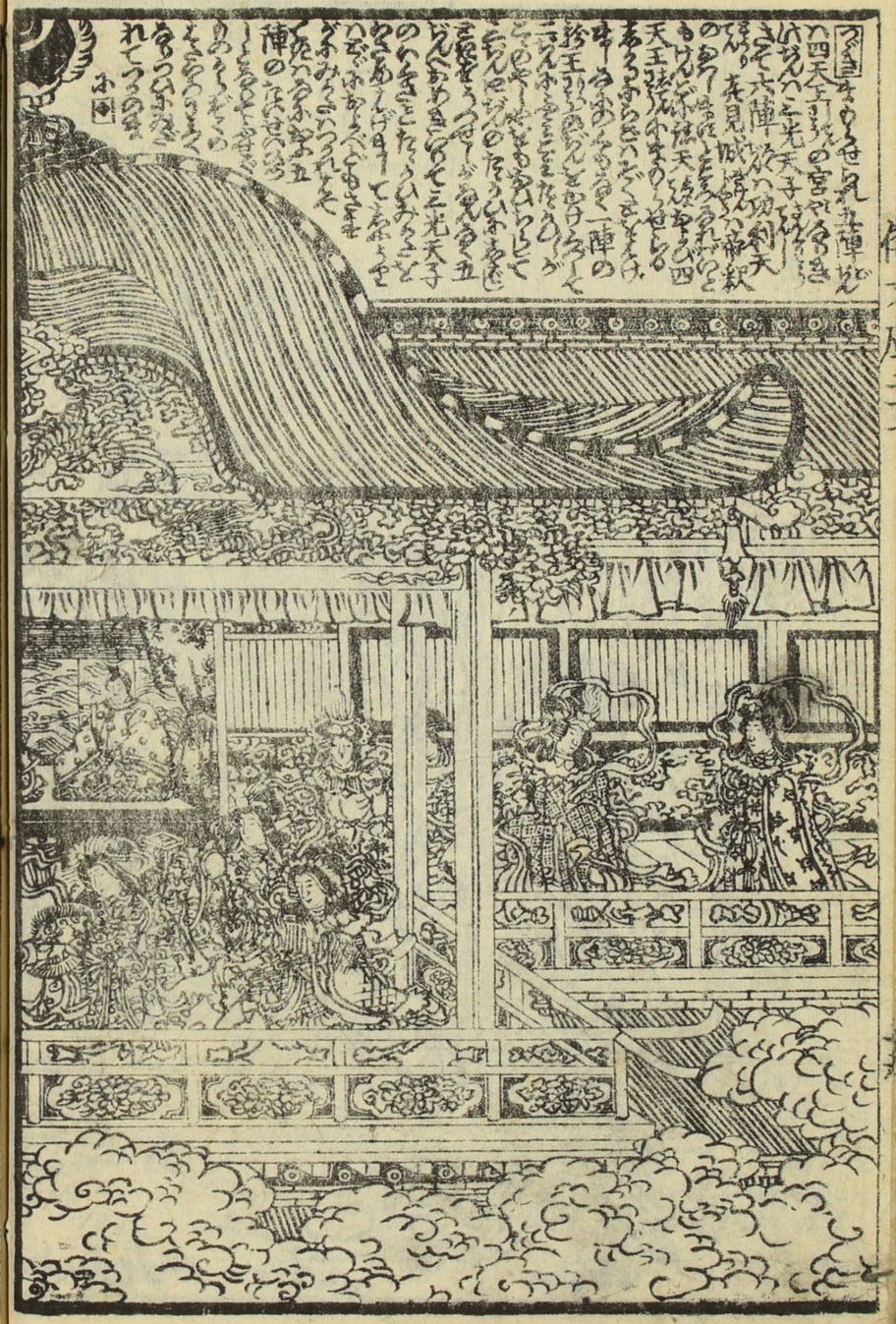
下

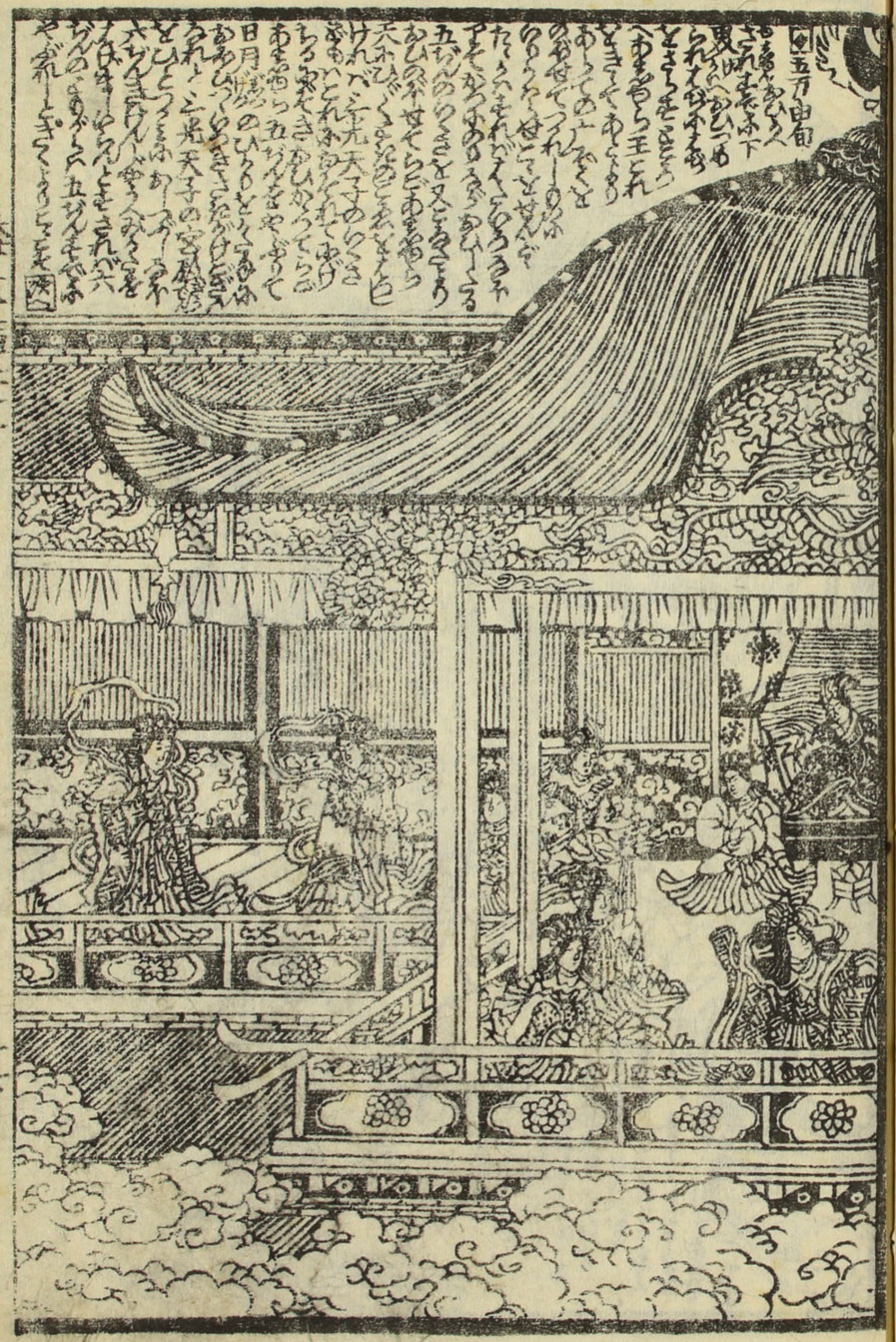
三
丹

白
可
丹

四天王
帝釈天
四天王

四
合
太





羅睺阿修羅

毒文庫二十一

功利天
寺見城

金翅鳥
舍脂夫人

万亭應賀作 一陽齋豊國画

四天王

錦重堂新板繪草紙目録

釋迦八相倭文庫 廿一編 廿二編 万亭應賀作 廿三編 廿四編 一陽齋豊國画

奥奉公出世繪合 應賀作

倭文庫太子雙六 應賀作 六編 如淵外史作

忠義教誡赤松譚 七編 一陽齋豊國画

京都 ちやうぐんようのりそのゝらの赤松みらさき一家の表を世れみごまつ〜こゝとやら〜げくろさ
茅紙ふたせ〜ゆりそらごゝふあ〜び

金 繪草紙錦繪本類 人形町通元大坂町代地角 上州屋重藏板

万亭應賀作
上

倭文庫

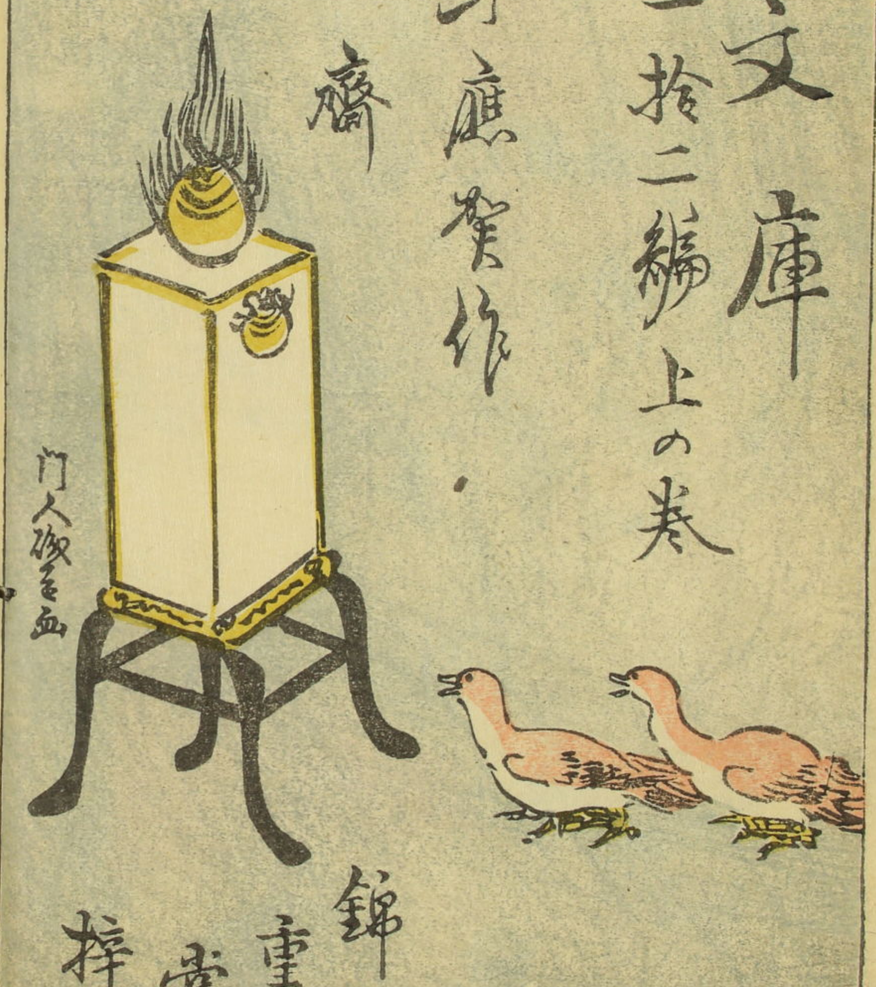
二拾二編上の巻

万亨庶賀作

一陽齋

豊國

画



門人後藤画

錦重堂

梓

釋迦八相倭文庫二拾二編之叙

夫如来鹿野苑の説法に三藏教とて小乘の戒定恵及び三明六通を得る聲聞の修行を專説ること又十二因縁六度の法門なども説ども是を皆小乘教とゝ扨往昔一個の比丘あり玉人の家に布施をなす玉人國王の摩尼珠を磨門口に居る折節あれば玉を盤の上に措て比丘に食を施んと欲して家内の奥へ入る跡を此家の鷲玉を呑主これを知ざ出て怒て比丘を絞縛して是を責比丘既に打擲を受れども戒を護て鷲の罪を云ざ時に鷲自然死せり と云これらの説に引つゞけて悪逆大罪の達波太子禍て人獣を求て國を亡さを支まで此巻に繰り返て看官杜撰と獣ゝ尚高評を揚へと云

嘉永五年壬子
孟陽 新梓發行

万亨庶賀誌

玉人の女房

玉磨の主人

舍利弗玉人に家ゑ布施を乞て鷲の為に苦悩を受る

舍利弗

瑠璃玻瓈硨磲碼碯

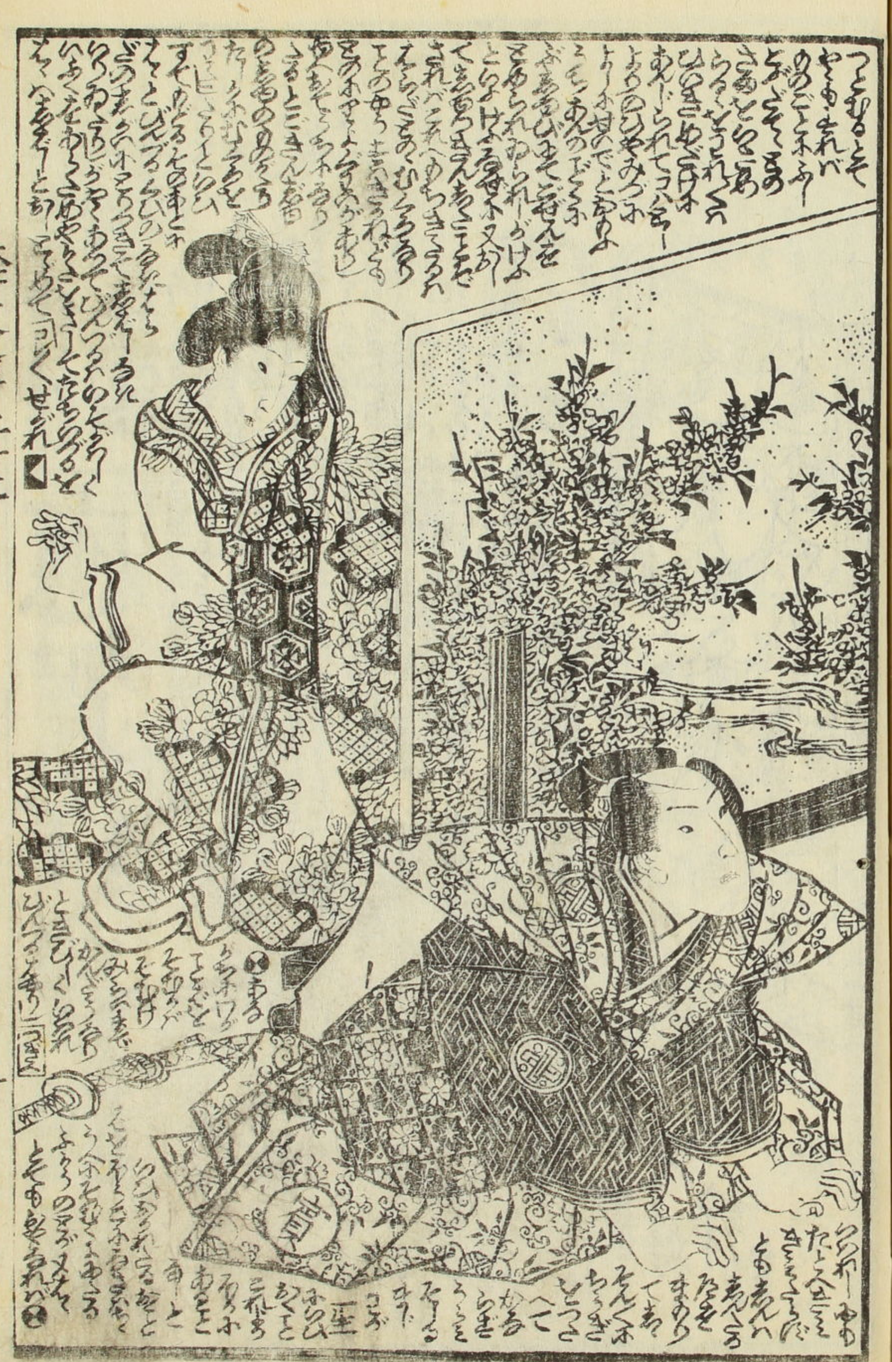
珊瑚珠

玉磨所

達婆太子
迦旃延の妻

私良亡國の達婆太子禍を求めて國を亡ぼす
老臣頗羅隨の子息賓頭盧
迦旃延
ワザハヒ

玉磨所



應賀作　豐國画

嘉永五年壬子春新板目録

奥奉公娘成人双六　二編　万亭應賀作　一陽齋豐國画

武藝立身舘双六　万亭應賀作　一陽齋豐國画

奥奉公出世双六　万亭應賀作　一陽齋豐國画

日蓮記旭衣　三編　万亭應賀作　一陽齋豐國画

神代藻塩草　二編　万亭應賀作　一陽齋豐國画

重榮御江戸繪圖　奉書四枚半續

一陽齋豊國画

倭文庫二拾二編

下

上のまきか

さるわどふびんづるせびるくたろ
なのやくもまくらてるふとぞうぎさろひと
ひすめをみつけいぐてちのえび
そのらひうけてろうむらんと
おちくくらさのくやてむしく
くすーあさるやどふいろけ
るうとらぐどもあをひあてくうひ
えそまをのうとうぐきくふ
○さのひひとくろせんを
るをこうどさろひとくく
あくとるをせんとあく
とくくくおりてせんい
のんをらでやくをあくい
せんやとの山をとをやれこれあこの
山のあくくとたろはとようぎくろひぐ
あまををやとどれよとどれりぎひがそぬ
くうとをえるろあとてとくちるじるくて
くうふひんづるかをこあまをーそのをふたく
ぎくくてこうぐのどとりをとんろゆくたくの
くちふやるもうこれちのくんびとくこれそのの
むわんをとたくらさんとまくんどろのまるいろめ
をがんをくもたくふさくこれてさをちぐふくひ
さとされそれもくるるをせんくるくちの
まあをきくをやうけやろむくんとわがひーふ
うぎひひとやくらくふのめのてちのくんびとあさ
んくのあをせいむりとおりくどもまうあのせひ
ゐくかくとまりくをまぐをりぐくをりもをりこをぎ
ひい山のあるとうくひんをやをコとらべくらいいあゐるのくるあいをもあれ山と
ひふいまくぐごくふそひくをうひ、ぬりう山ゐやんのとふこをゆうあいぐ◆

◆かの山へとぢのが
アそこぎのひとろ
ねくぐちのくひ
とやくくけんそれよ
それよとくもくる
ぐをもくくくまろ
くをんいふ
ををまのまをを
かのをまくくくて
ゐ人ぬる山ゐまう
せへとくのをきぎ
けををそくちち
ぎ者山とをを
をくハ流油川熟の上
ふのとくろいく
たををまぐちよ
山をちふーて
をくをそ十二番目の
ふくをくくのくろ
とくふけくをのくろねのを
ふくよくのぐくるのくりぐ
たくふ又ヲのくけあくのゐ八功極
池をくこれをくり又ゐ池ゆとダルボク
子・くものふをくおくバ子池くけるくり
をくのうんせをくるゆのこのくけの水とのあバ
をくむエとゆをきくりとくをさそ ひんぐるいかの◆

つぎ　こしぐの

くとのそ人ふたさ
ひてらきそもつで
のそだつやうやく山の
ふりとくきくらあぐ
やまとひさくふあをを
としてけんそる山あくへ
のぐりきて「まろりひぐくろりのハ
あくまにくたちたちのかもやく
るたらぐらかれひんづるとハ
それぐらことゆいはつろちたらぐハ
きくとのさあらぎひとりひよりのあり
ところえてんびとくくれそのおれんを
たらさんとぶそれぐーげけーきとが
えやくもたくふんたぐあられそれも
かるりむちのんびとやくうくちくらげくる
ひぎーふそれりくくちくらげくる
のちきくれんびとひんくつるを
べーとのつひきるくぬあくあいの
ありたをやいそむられぎかん
とくまりぐくみちふくくの

◆ものがべー

○ちたとのゆぐくふ
ちりひくらぐれぐりわ
とのへもたろかんくらとあくも
るどろたろかんくらとぶハ
ぐとふとれいんやれいさんの

◆ひさあ
てんびくくれ
くるたのぐろハ
かひてたくだあく
ぎあくとるはびくゆくぎ
ひひぐきくるとひ

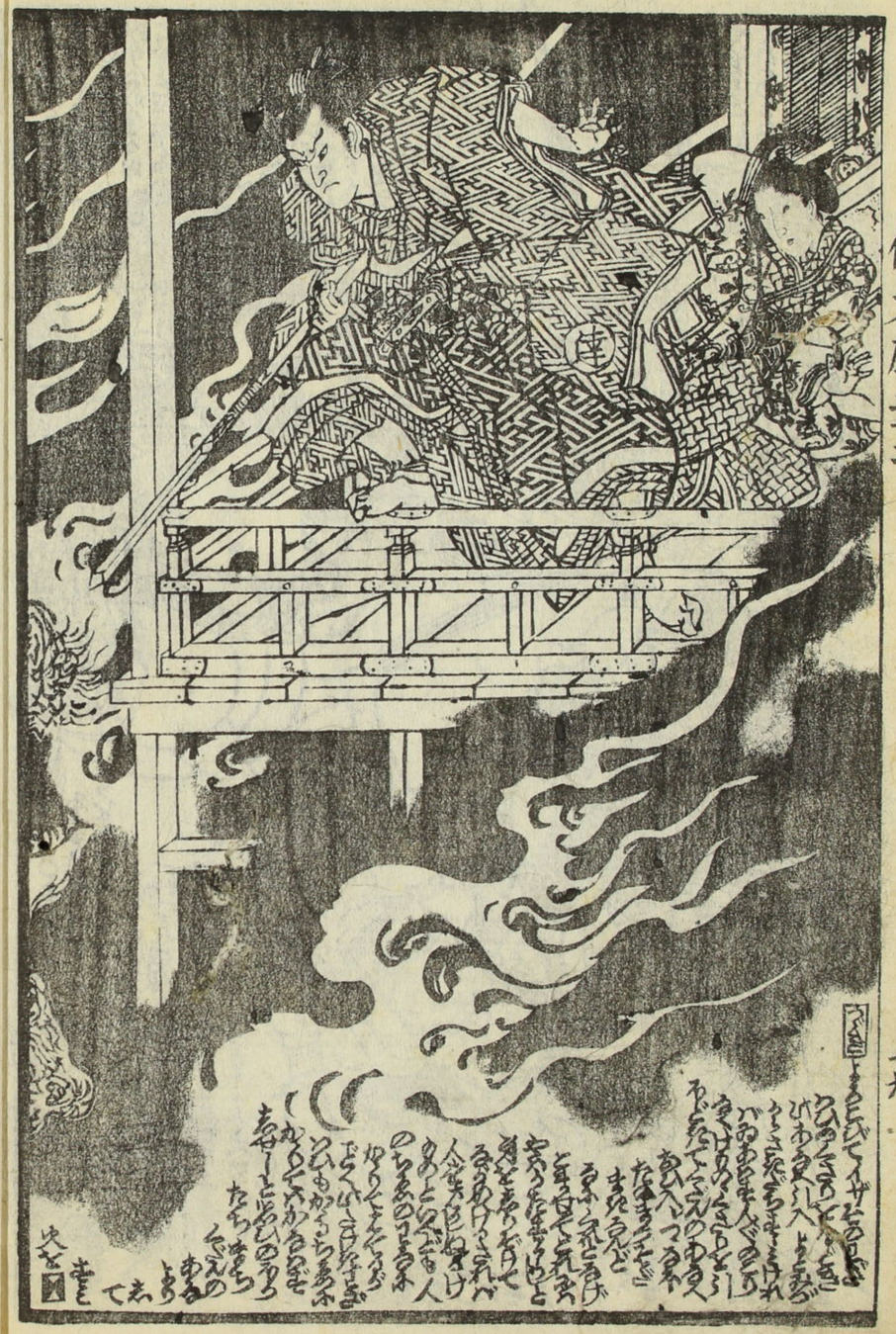
賓

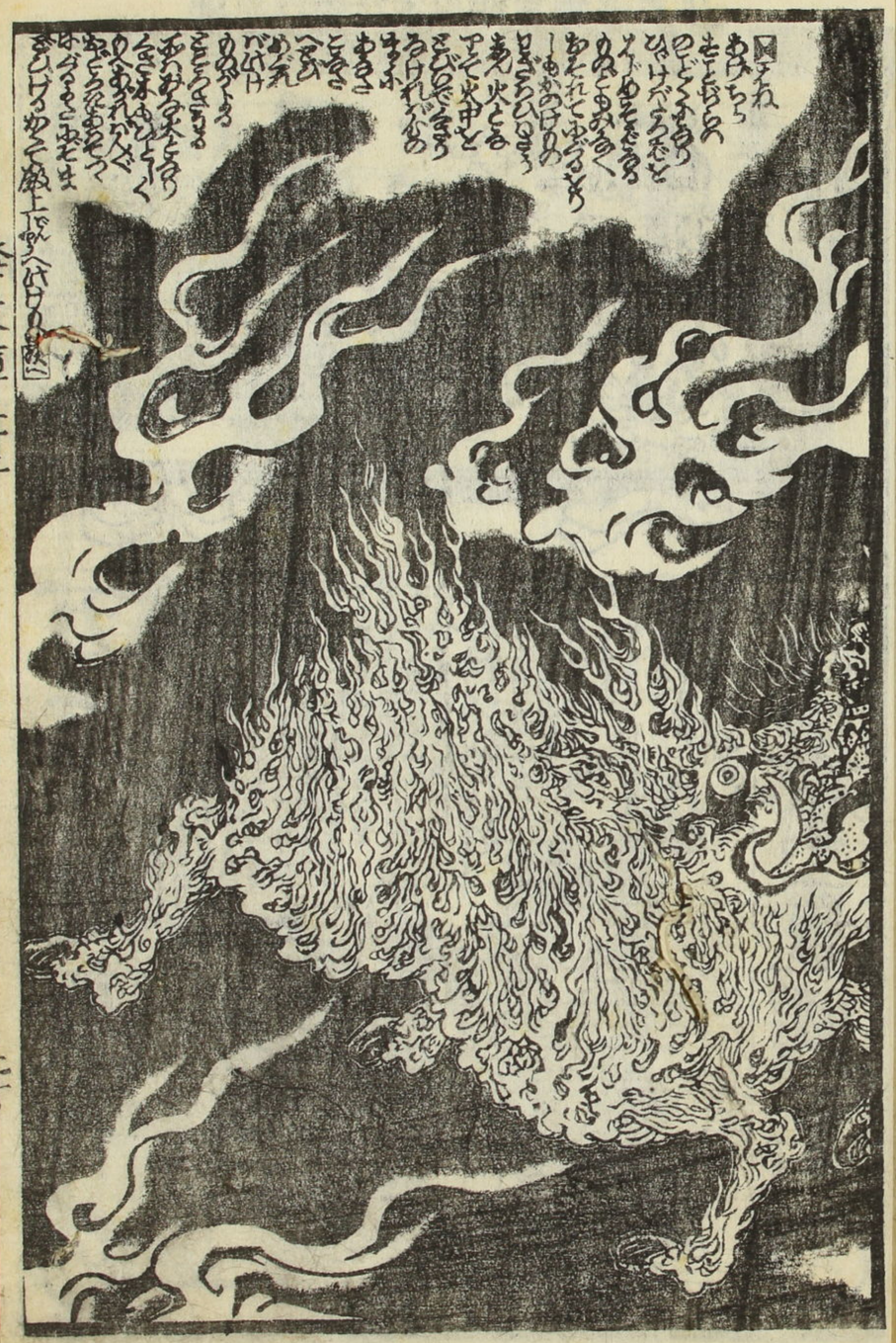
◆そのちくろを
ゆぐくれぐちち
ごとくふこぐ
名とあくて
そのちぎくひ
とくふあもも
あくくさく
せんくろ
こぶべー
さそくれ
いかりの
名と
正合
利仙
よんび春
ぐもまくとハ
天上の五行
ぎくの星ハ
ぬそ南方ぐんん
の火徳紅と
つくさとる猛
惑星ハい
ぎるちとれ
るりされハ
くれ火星ぎ
ふーく日ハ
さ紀ぐくて
ゆるくとあと
春る利ぎく

十一

つぎくひハ山ふあくと
くくくくくくらぐ
くくひくくとのみくふ
ぐまりてくれちで
たくぐまりくくり
くくそのくくく
くもかくもくくくう
くれくとあくれくそ
るふくとぐくくくひて
くのくくあくくくあくへ
あくれくーひくくふ休
もちひくくれちの
あをきくうのるふ
ひるぎくすくくく
せくくくぎくくひハ
ひくれふあくぐ
ひくくたくくくひ
いあくさくく
くくぎくくひ
くくくくくくだハ
あくふくくくり山
ふくくくくくくひ
けれあるきくくを
くちちあめ「アラ
くれやくくやくくハ
山ひくくくくくくあり

日たくくくさまくくくと
そもくくくくくくくハ
くくくくくくくく





堀の内妙法寺の額面神画の写

万亭應賀作

一陽齋豊國画

錦重堂新板繪草紙目録

釋迦八相倭文庫 廿一編 廿二編 廿三編 廿四編 万亭應賀作 一陽齋豊國画

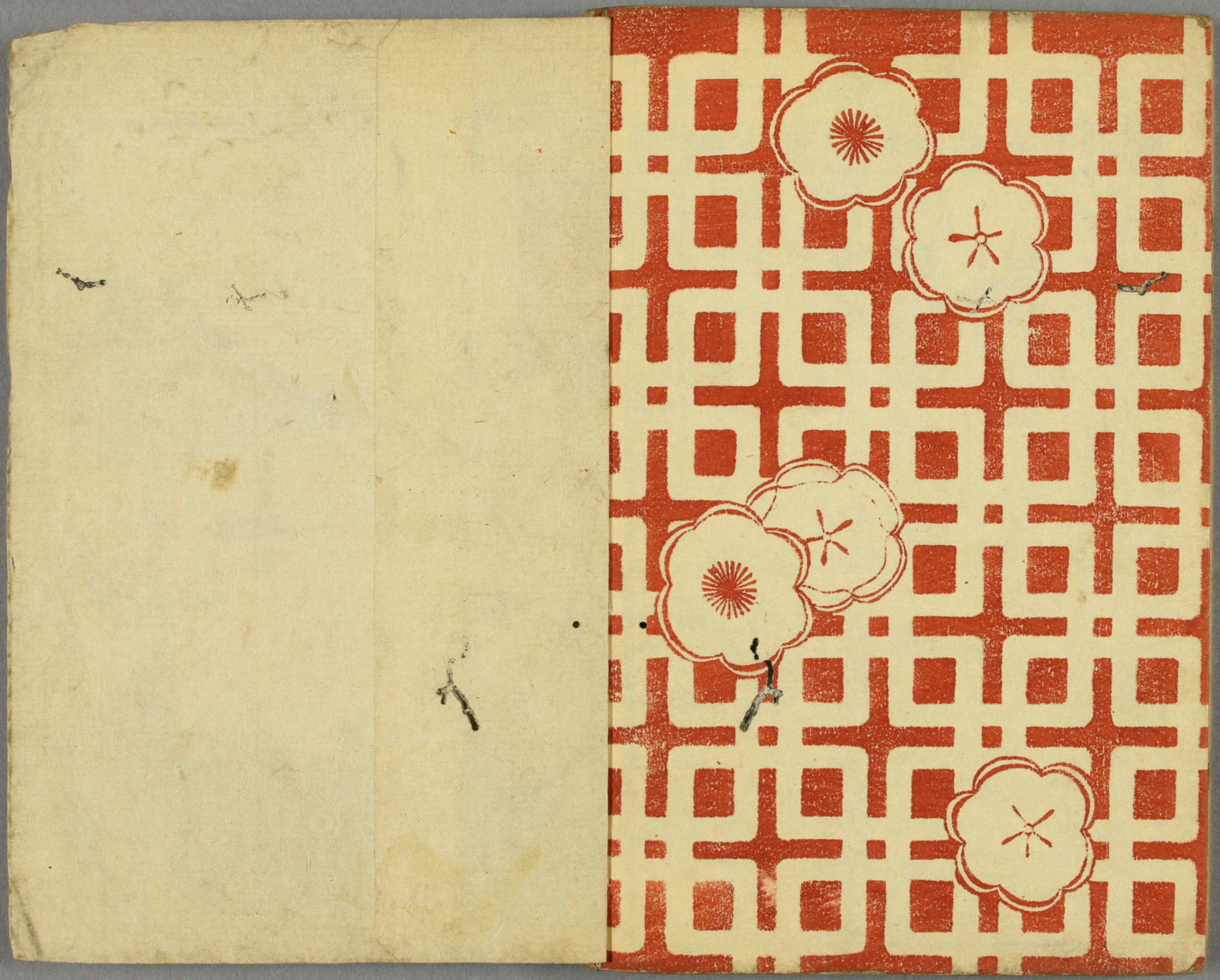
奥奉公出世繪合 應賀作

倭文庫太子雙六 應賀作

忠義教誡赤松譚 六編 如淵外史作 七編 一陽齋豊國画

京都 ちやうぐんようのうちの赤松みつまつ一家の委しきはなしひとふしあり その紙ふくせ なりこそらごとふあ〜〜

金 繪草紙錦繪本類 人形町通元大坂町代地角 上州屋重藏板



一力亭貞鶴著
一陽斎豊国画
傳文庫
北斎画